

ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書

京都大学文学研究科博士課程2年 横田 悠矢

今回の派遣は、ハイデルベルクおよびストラスブールの研究機関を視察するとともに、両大学の学生・院生の議論や交流を通じて研生活やヨーロッパの情勢について意見交換を行うことのできる貴重な機会であった。

ハイデルベルクに関しては他の参加者の報告書に譲り、以下ではストラスブールでの日程に言及する。

ストラスブール大学日本語学科では、学士課程から博士課程まで多くの在籍生と交流を行った。日本から帰国して間もない、あるいは今後日本留学を控えているという院生も少なくなく、学科全体としての留学志向の高さが窺われた。また各人の関心についても、日仏翻訳や民間信仰、駅の建築構造など幅広く認められている点は特筆に値する。

ワークショップでは、移民・難民問題を背景に近年深刻な問題となりつつある「グローバリゼーションのなかのナショナリズム」が議題となり、ソフト・パワーとミリタリズムの関係や日本国憲法第9条、ヘイトスピーチ、食文化とグローバリゼーションの結びつき等について議論が行われた。とりわけ差別的発言に対するヨーロッパでの厳格な規制、表現の自由と倫理的判断との境界、漫画やアニメ等の文化が内包する潜在的な脅威といった論点が印象的だった。

市内見学ではストラスブール大学日本語学科のサンドラ・シャル先生とアルザス地方の伝統料理をご一緒したほか、ストラスブール司教の宮殿であったロアン宮（美術館、考古学博物館、装飾美術館）やストラスブール大聖堂、プチット・フランス等を訪れた。またフランスで唯一の国立兼大学図書館を訪問し、貴重書が収められた一般非公開の書庫を含めて、職員の方から施設のご説明を頂いた。

今回の派遣を通して、時事に係る問題意識の重要性を再認識した。報告者は現在パリに留学中であるが、ヨーロッパにおける移民・難民問題や、大統領選挙を間近に控えるフランスを含めた諸国の右傾化を身近に感じるにつけ、一連の動向への疑念は深まる一方である。現状に対する解決策が模索されるなかで、文化越境研究の意義はいつそう高まりつつあると言える。

文化越境という意識が広く共有されてゆくためにも、今後多くの学生・院生が盛んに行き来し活躍することで、京都大学とハイデルベルク・ストラスブール両大学との提携がさらに強まることを期待している。

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学 文学研究科 ドイツ語学ドイツ文学専修 博士課程1年 (橋本 紘樹)

ハイデルベルク・ストラスブール派遣プログラムは、京都大学・ハイデルベルク大学共同学位制度の設置に向け、「文化越境研究」を通じたワークショップなどにより、協定大学間の学生交流を深めることを目的として行われている。本研修における個別のプログラムの詳細は他の参加者の方々が報告してくれるので、私はハイデルベルク滞在を中心に、少しばかり俯瞰的に記述し、研修での経験の全体像とそこから得ることのできた知見を報告しようと思う。

派遣プログラムでは、日本には体験することのできない貴重な機会が数多くあった。なかでも、初日に行われたハイデルベルク文化越境研究センターに属する学生とのワークショップは、世界各国から集まった学生たちの専門分野が様々で、発表や議論も多様性に富んだものであったため、刺激的であった。しかしながら、英語で進行するプレゼンテーションやディスカッションはレベルが高く、しばしば正確に追うことができず、質問を交えた会話を行う際にも十分な表現ができなかったため、しばしば場に取り残される思いをしたことも事実である。その際に印象的だったのは、ハイデルベルク大学の学生たちが、不十分な表現しかできない私たちに対して、懸命に理解しようとする姿勢を絶えず見せてくれたことである。そのおかげで、お互いに意見を交え、理解を深めることができた。このことは、ワークショップ後の食事や、二日目以降、一部の学生とハイデルベルクの街を一緒に歩いた時も同じであった。こうした経験のおかげで、こちらが相手を理解しようとし、自分のことを理解してもらおうと努めれば、相手も必ずそれに応じてくれるという素朴な、それでいて根底的な事実気づくことができた。また、研修のなかでハイデルベルク大学の日本学科を訪問し、図書館の蔵書を見せていただいたのだが、これも非常に面白く有意義な経験であった。日本語の本が図書館にあるということは、私たちにとって極めて日常的なことである。しかし、日本から遠く離れたドイツで、日本語の蔵書で研究が行われているという事実にある種の新鮮味を感じた。自らの国の文化が他国に受容され、文化間での交流が進展しているのを目の当たりにしたように思えたからである。

これはストラスブール大学でのことになるが、ワークショップの締めくくりに、同大学のシャール先生と京都大学のカム先生が、「他者」として異なる文化圏に身を置くことの意義と、いかに微力であれ「他者」を排除する構造に抗して実践的に取り組むことの必要性を、ご自身の体験に即して話された。短い期間ではあったけれども、この派遣プログラムを通じて学ぶことができたことは、まさに両先生のこの時の発言に集約されるものであったように思われる。私のなかで研修の経験は、「他者」と相互理解という問題を捉えなおし、グローバリゼーションとナショナリズムという世界的な問題を前に、個人として何をなすうるのかということを見つめなおす契機となった。

そして、このような素晴らしい経験をすることができたのも、本プログラムを支援し、参加学生が研修に集中して取り組むことができるよう、全面的に支えてくださった方々のおかげである。京都大学をはじめ、ハイデルベルク大学、そしてストラスブール大学において、本研修に尽力し、関わってくださった全ての方々への深い感謝を、最後に申し添えておきたい。

「ハイデルベルク・ストラスブール研修参加報告書」

京都大学文学部・研究科2年 古川 文望

今回のハイデルベルク・ストラスブール研修は私にとって初めての海外体験でありました。乗ったことのない飛行機で母国語の通じない地域に行くということで不安も多く、出発前日はかなり神経質になってしまいました。しかし、カム先生を始め、引率の先輩方や生徒の皆さんのおかげで非常に楽しく、有意義で刺激的な8日間を過ごすことができました。全行程を通してお話しさせていただきたいことは数多くあるのですが、分担の都合上、ハイデルベルクの観光をテーマにさせていただきます。

京大オフィスや学生寮、ハイデルベルク城の見学といったハイデルベルクでの観光は二日間に渡ってプログラムに組み込まれており、自由時間もたっぷりいただいていたので想像以上にハイデルベルクを満喫することができました。また、ハイデルベルク大学に在籍なさっていたカム先生が案内してくださったので、地元の方に人気の駄菓子屋さんやハイデルベルク城についての小話など、ただ町に行くだけでは知り得ない様々なことを教えていただきました。色々なものを見て、聞いて、考えたのですが、ここで全てを書くことはできそうにないので中でも印象的だったいくつかに絞らせていただこうと思います。

ハイデルベルクの旧市街はハイデルベルク大学が様々なお店と混ざり合っている、大学と一体化している町でした。京大オフィスのある学生寮も市街の中にあり、知らずに歩いていると気づかないだろうと思います。重厚な石造りの町並みは想像していたドイツの町並みそのもので非常に美しかったです。

旧市街から山を見上げると目に入るハイデルベルク城は中世に建設された城で、そこから町全体を見渡すことができました。度々増築が行われたために、様々な建築様式が混ざっていたのも印象的です。地下には大きなワイン樽があり、上ることができるのですが、高所が苦手な私には少し怖かったです。カム先生が教えてくださった城にまつわる伝説や知識は、非常に興味深く面白いものばかりでした。

また、哲学の道からも町を一望できました。京大の近くにも哲学の道と名付けられた道がありますが、こちらはかなり急な坂道でした。この道からハイデルベルクを見ると、ネッカー川を挟んだ向こう側に大学のある町が見えるので、鴨川を挟んでみる京大と位置関係が似ているように思えます。

他にも、地元の人々の利用するマーケットに連れて行っていただいたり、ハイデルベルク大学の学食で昼食をしたり、仲良くなった学生の方に学生オーケストラのコンサートへ連れて行っていただいたり、と得難い経験をたくさんさせていただきました。ワークショップでは優秀な学生の皆さんと交流したことで、今まで知らなかった視点や考え方に刺激を受けました。対して、こういった観光では様々な日本との違いを感じ、自分のナショナル・アイデンティティを再認識しました。これから専修している日本史を学ぶにあたり、他地域から見た日本の歴史の特異性や、歴史の普遍的な部分について意識していきたいと思っています。

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部・2年 深谷 俊

本稿では、主にハイデルベルク大学の学生とのワークショップについて報告する。

1. 英語であるが、もっと勉強したいと思った。今回一緒にワークショップをしたハイ大の学生 3 人のうち 2 人は、アイヌ問題と原爆の集団記憶の問題という、日本に関係した発表をしていた。その議論に当事者である私も参加したいと思ったが、発表が聞き取れなかった。全員がセンター試験のリスニングのようなきれいで流暢な発音をするわけではない。その上、議論が白熱してくると、早口になったり、学術用語など難しい単語を使ったりすると議論についていけなくなってしまった。もっと英語を使えるようになっていろいろな人としゃべりたいと思った。

2. 私たちが参加したハイ大の授業は、東アジア学科の学生を中心にイギリス、アメリカ、ドイツ、トルコ、イタリア、韓国、中国、ロシア etc、という transcultural な人々で構成されていた。それゆえ、日本人なら思いつかないような点から意見が出されたり、ニュースなどではわからない各国の事情が具体例として挙げられた。例えば、私たちの班は寿司をテーマにした発表を行ったが、ロシア人の学生がロシアの寿司屋について発言したり、イタリアの女学生がイタリア料理が他国に輸出され違うものになっていると嘆いていた。また、アメリカ人の学生は、授業の後に、アメリカの食文化も寿司と同じ側面があるかもしれないと共感してくれた。自分の発表は理解してもらえるか不安に感じていたが、国籍も背景も違う人でも、一生懸命に伝えれば伝わるのだと感動した。

授業の発表であるが、transcultural studies というだけあって、文化と文化の交じり合う部分に焦点を当てていたように感じた。前述の二つ以外には、神聖ローマ帝国の黒人奴隷の歴史が取り上げられていた。多様な背景をもつ参加者からいろいろなことが学べた。例えば、ドイツに住むトルコ系の女性が、アイヌ問題をマイノリティーというくくりでとらえ、自分の境遇と重ね合わせていた。

3. ハイデルベルク大学はさまざまな背景を持つ人たちと学びあい、いろいろな価値観を知るには最高の環境であった。そのような環境に身を置きたいと願う人には是非おすすめである。

最後にこのような素晴らしい機会を用意してくださった国際交流推進室の皆さん、引率のカム先生、横田さん、橋本さん、ほかの参加者のみんな、推薦状を書いてくださった先生、旅先で出会った人たち…など多くの人に感謝を申し上げて、私の報告書としたい。

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣 参加報告書」

京都大学 文学部2回 水無瀬 美歩

今回、文学研究科のハイデルベルク大学との共同学位の紹介をうけて、文学部生として、ドイツ・ハイデルベルク大学とフランス・ストラスブール大学へ派遣させて頂いた。両大学の学生とのディスカッションや、ハイデルベルク大学の京都大学オフィス見学、市内見学など、大変有意義な機会に恵まれた、素晴らしい1週間だった。そのなかでも私は、ストラスブール大学との発表・ディスカッションについて詳しく報告したい。

今回の派遣にあたっての、共同テーマは、「グローバル化のなかのナショナリズム」であった。グローバル化がすすむなかで、移民排斥運動や右傾化が高まるなど、各国でナショナリズムが高まっているのは明らかである。2016年は、イギリスのEU離脱化やアメリカのトランプ大統領就任など、衝撃的なニュースも多く、今こそグローバル化とナショナリズムの葛藤について改めて考える機会が必要だったと思う。

ストラスブール大学とのワークショップは、参加者は日本語学科の修士課程・博士課程の学生だった。彼らは日頃は大学では仏日翻訳の授業が多いらしく、各自日本に関する独自のテーマで論文作成を進めているという。日本留学経験者・内定者もおおく、流暢な日本語でプレゼン発表してくれた。ストラスブール学生は、「日本のソフトパワー世界にみられるミリタリズムの台頭」「自民党の憲法改正草案(第9条)」「ヨーロッパから見る日本のヘイトスピーチ」というテーマでそれぞれ発表した。私たち京都大学からは、「身近な視点からのナショナリズムとレイシズム～在日問題～」 「ヘイトスピーチについて」 「食文化をとおしてみるグローバル化とナショナリズム」というテーマで発表させていただいた。

まず驚いたのが、ストラスブール学生の、日本の憲法改正、右傾化・保守化、ヘイトスピーチへの問題意識の高さである。日本のゲームやアニメなどへの関心も高いことから、「ミリオタ」現象への危機感を抱いている学生もいた。海外でも人気のある「艦これ」といったゲームなどは、市民に戦争についての偽りのイメージを植え付け、戦争は楽しいと思わせてしまう効果があるといえる。それによって、軍事・サバイバルゲームなどに楽しみを見出す「ミリタリーオタク」が増えており、日本の現状のソフトパワー・クールジャパン政策は、このような危険な一面を併せ持っているのではないかという指摘が印象的であった。私自身も以前から、そのような立場にたっていたが、日本国内にいる限り、日本の作品に対して強く非難するのは難しい。それらの本当の目的は平和を唱えることであって、戦争を題材に、戦争の非道さを伝える一手段なのだという意見の鵜呑みになってしまいがちだ。しかし改めて、海外には日本の作品・政策のひとつひとつが、日本を表わす重要資料として伝わるのだということ意識しなければならないとおもった。

もうひとつ印象的だったのは、日本のヘイトスピーチについて紹介したストラスブール学生が述べた、「憎悪のピラミッド」だ。憎悪の段階が5つにわかれ、ピラミッド型の下段から、偏見→偏見による行動→差別→暴力行為→殺戮・民族浄化となる。このピラミッドを、フランスの学生が、日本での在日朝鮮人などへのヘイトスピーチについて発表するという空間で知ったのはとても胸に刺さるものがあった。私自身、日本での在日朝鮮人への偏見、在日特権、在特会、新大久保などでのヘイトスピーチについて今回発表させていただいたが、在特会などの過激な行為は、一部の極端な形態だという認識があったようにおもう。しかし、このピラミッドの図を見た瞬間、日本人のなかに多かれ少なかれ潜んでいる彼らへの偏見は、それを口に出すか出さないか、過激な行動に出るか出ないかは関係なしに、すでに潜在的に「憎悪」の段階に属しているのだと言うことを直感的に感じさせられた。本人の自覚があろうとなかろうと、「偏見」から「偏見による行動」に、「偏見による行動」から「差別」になるにつれて着実にピラミッドの段は上がるのであり、次には「暴力行為」、そして「殺戮・民族浄化」が控えている。私たちが何気なく見過ごしている、在日朝鮮人への偏見や差別の感情は、実は「民族浄化」につながる恐れのあるほどの、明らかな「憎悪」の感情なのだということにぞっとさせられた。事前に在日朝鮮人について調べている中では、それほどわからなかった、このぞっとした感覚は、遠いフランスで、フランスの学生に指摘されるという空間でこそ気づけたことなのかもしれない。また、在日「特権」は、彼らが障害を抱えながらも、日本で少しでも住みやすくするための手続きの手順なのに、なぜ日本では「特別な権利」として非難されるのかという、在日朝鮮人文学を研究しているフランスの学生からの質問は、帰国後も私の胸に残っている。

グローバル化のなかで、多様化・均一化がすすむことで、アイデンティティに関わる自国の特徴が喚起されて、ナショナリズムが強化されるという現象は当然かもしれない。しかし、恐れるべきナショナリズムや排外主義は、他者に対する知識の乏しさや、他者を人間だとみないことからの偏見・差別からくるものとおもう。ストラスブール大の先生が最後におっしゃった、「外国人を嫌う人は、自分が「外国人」になったことがない人です。日本の学生が忙しいのは充分わかっていますが、一生に一回でも、あなた方が外国人になってください。」というお言葉を、ずっと大切に心に留めていきたいと強く思う。

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部・哲学専修2年 深町 朱梨

私はフランス・ストラスブールでの市内見学・大学図書館見学について書きたいと思う。

ストラスブールに着いて1日目にプティ・フランスやストラスブール大聖堂などを見学した。プティ・フランスでは、中世の街並みをそのまま残す美しい川沿いの家々が印象的だった。かわいい色の壁と木組みでできた家が川にうつっている風景は、まるで絵本の世界に迷い込んだようであった。ストラスブール大聖堂では、その荘厳な鐘の音と鮮やかな光を放つバラ窓に圧倒され、とても神聖な気持ちになった。特にライトアップされた姿は何度見ても息を飲む美しさだ。夜はストラスブール大学日本語学科のシャール先生と食事をした。先生はとてもエネルギーが豊富で、会話を交わすうちにアルザス地方への興味がかきたてられ、今後の勉強や翌日に控えたワークショップへの意欲が刺激された。食事ではアルザス地方の伝統料理、シュークルートを堪能した。

二日目にはストラスブール司教の元住居・ロアン宮を利用した美術館と、ストラスブール大学を見学した。ロアン宮はストラスブール大聖堂の真向かいにあり、美術・装飾・考古学資料のそれぞれが展示してある3つのミュージアムで構成されている。貴重なコレクションやナポレオンも宿泊したという部屋を見ていると、当時の情景が目に浮かぶようだった。次にストラスブール大学内を見学した。特に印象に残ったのは大学の寮や、大学内の語学学校、キャンパス内の雰囲気だ。引率していただいた横田さんが当時ストラスブール大学に通っていたこともあり、「もしここに留学したら…」と、大学生活をリアルに想像することができた。

帰国前日には国立図書館をストラスブール大学日本語学科の生徒と共に見学した。図書館は古い建物の面影を大切にしながらも光を多く取り入れた近代的な設計が印象的だった。例えば、昔の装飾の後がついた柱を新しい建物にも使用していたり。蔵書の古さ・貴重さにも驚かされた。この街の「知」がいかに歴史深いものかということが感じられた。

アルザス地方は3度ドイツになり3度フランスになった、とシャール先生はおっしゃった。その壮絶なバックグラウンドは写真や文書で日本から知るだけでは十分に感じることはできない。実際にその空気に触れ、食べ物を食べ、街並みを歩いて初めてわかることがある。また、海外に留学することはとてもハードルが高いことだと思っていたが、実際に大学を見学してみるととても身近なこととして想像できるようになった。この貴重な機会を得た経験を、今後の進路や将来のことを考えるときに生かしていきたい。

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣 参加報告書」

京都大学文学部2年 清水来奈

ハイデルベルクの学生とのワークショップに重点を置いて報告する。

約12時間のフライト、乗継のため全速力で駆け抜けたアムステルダム空港、故障によりシャワーの出ない浴室…。しかし、翌日の朝、そんな数々の困難も一瞬で消え去ってしまうような美しいハイデルベルクの街並みが私たちを迎えてくれた。前日からの疲れなど忘れ、数時間後のワークショップのことは一旦頭の隅に追いやり、朝食の後散歩に出かけた。色鮮やかな建物の並ぶ石畳みの道、日本とは全く異なる景色を歩くと、自分がまるで映画の中のワンシーンにいるかのような気分になり、このような街並みを歩いて登校できるハイデルベルクの学生をうらやましく思った。しかしそんな幸せな気分に入りヨーロッパの空気を生身で感じつつも、ふとした瞬間に欧州の抱える移民問題を匂わせるような要素を街のところどころで感じ、その日行うプレゼンテーションのテーマの一部である移民・難民問題について早速考えることとなった。

ハイデルベルク大学に一步足を踏み入れると、すれ違う人々を見渡すだけでも様々な異なるルーツを持った人々がいることを感じ、これから取り上げる問題について意識させられた。私のグループは日本で行われるヘイトスピーチとヨーロッパでの大規模デモを取り上げ、その後のディスカッションでは在日や移民に対する人々の意識の違い、政府の対応の差などが話し合われた。次のグループでは在日と在日に対する日本人の意識に焦点を当て、それから食を通して見えるナショナリズムについて発表が行われた。ハイデルベルクの学生による発表テーマには移民のルーツを探るものから、アイヌ民族、広島・長崎の原爆投下にまつわるものがあり、その内容も高度なものであった。

これら数々の発表と、ハイデルベルク大学生とのディスカッションを通し、外国人に対する日本人とヨーロッパ人々の考え方の違いを大きく感じた。ハイデルベルク大学の生徒は、自分のルーツ、自分が一国の国民であることを強く意識しているように感じた。確かに、19世紀まで鎖国によって外との交流をほとんど閉ざしてきた日本と、移民と切っても切り離せないヨーロッパでは、「内と外」についての考えが根本から違ってくるのは当然であるが、こんなにも意識が異なるものかと非常に驚いた。

また、ハイデルベルクの学生は様々な問題を自身の置かれた環境や自分の研究分野の話に置き換え、オリジナルな意見を発信・交換する能力が高く、皆が活発に手を挙げ発言していた。ディスカッション形式の授業にほとんど参加したことがなく、常に受け身の姿勢で授業を受けてきた自分とのレベルの違いを痛感させられた。確かに、年齢の差による知識・経験・能力の差、国民性の違いからくる積極性の違いはあるといえど、これまでの自分の学びの場における態度を見直す良い機会となった。今、帰国して約二週間が経つが、この意気込みを忘れずにこれから勉学に励んでいく所存である。

他にも強く印象に残ったのは多々あるが、その一つがハイ大生の語学能力の高さである。中には五、六ヶ国語を易々と操り、Language master と称される学生もいた。英語とは6年間、フランス語とは2年間寄り添ってきたにもかかわらずほとんど身になっていない自分とは、言語に対する取り組みの姿勢が全く違っているのであろうと、またしても自分の学びに対する姿勢を見直す機会を得た。

この研修での約一週間、ヨーロッパの人々の国民としての意識や移民・難民に対する考え方を常に生で感じる事ができたが、一方で自分自身の日本に対する考え方、日本国民としての意識は曖昧なままであった。彼らの姿勢を目の当たりにした後で、自分には日本人としての意識、国を愛する気持ちが不足しているのではないかと不安になった程である。しかし、帰国後すぐに京都の地を歩き、ヨーロッパとは全く異なる日本の文化に触れたことで、自分の日本人としての意識を以前よりも強く感じる事ができた。ハイデルベルク・ストラスブールで触れた様々な意見や得た知識をそこで終わらせるのではなく、今度は日本という地で改めて考え直していくことが重要である。

自分にとってヨーロッパを訪れるのは今回が初めてであり新しい体験をすることができたが、明確な研究テーマを持ち現地の学生との交流を目的としたこの研修は、多くの大切なことを学び、得ることのできた非常に貴重な体験となった。

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部 社会学専修2年 大西佑佳

今回の派遣プログラムでは、ハイデルベルク大学とストラスブール大学での発表・意見交換と、両大学の教育研究機関や観光地の訪問を行いました。どの体験も非常に印象に残っていますが、私は主にストラスブール大学での学生ワークショップについて報告したいと思います。

ストラスブールの市街は、Petite France に代表されるように伝統的な建物が残っていてまさにヨーロッパだと感じられましたが、ストラスブール大学構内は、ガラス張りの建物が並んだりしていて近代的な印象を受けました。大学の敷地はとても広く、建物と建物の間を歩き来するのが少し大変だと思いました。ストラスブール大学には、主に留学生のための語学教育を中心とした建物があり、留学生はそこで色々な相談をしたり、語学能力試験を受験したり、他の学生と交流することで語学能力を向上させたりできると聞きました。留学生受け入れへの体勢が非常に整っているのは良いことだと思いました。

学生ワークショップの前には、ストラスブール大学日本語学科の学生たちと一緒に昼ご飯を食べながら交流をしました。ストラスブール大学の学生は皆日本語が上手くて、英語やフランス語があまり話せない私たちにとっては非常にありがたかったです。しかも、私たち日本人でも知らないような日本のポップカルチャーを知っている人もいて、動画を見せてもらったりしました。どうして日本語学科に入ったのかを聞くと、「日本のマンガやアニメが好きで勉強しようと思った」という答えが多く、語学の勉強は自分の興味関心から入ることが上達の秘訣なのだと思いました。

学生たちとの交流の後は、トランスカルチャー、グローバリゼーション、ナショナリズムなどのテーマをもとに、京都大学とストラスブール大学から3グループずつ発表を行いました。私たち京都大学からは日本の移民問題や食文化とヨーロッパやグローバリゼーションとの関係などの発表を行い、ストラスブール大学の学生は「自民党の憲法改正草案」「日本のソフトパワーに見られるミリタリズムの台頭」「ヨーロッパから見る日本のヘイトスピーチ」というテーマの発表を行いました。ストラスブール大学の学生が3グループとも日本のことに関する発表で、かつ日本人にとっても難しい内容を扱っていたことに驚きました。各グループの発表の後にはディスカッションの時間があり、発表者への質問や、自分の意見、先生からの問いかけに対する考えなどを自由に述べました。ディスカッションの最後のまとめの時に、先生から「外国人という経験は大切」という話を聞いたのが非常に印象的で、京都大学の学生もストラスブール大学の学生も、その言葉に共感している様子でした。

今回、1週間という短い期間ですがハイデルベルクとストラスブールを訪れることができ本当に良かったです。ハイデルベルクのワークショップでは、英語を駆使して高度な内容のディスカッションをできるようになりたいと強く思いました。また普段から政治に関心を持ち、日本や外国のナショナリズムについて自分なりの意見を持っておくことも大切だと考えました。この派遣プログラムに参加したことによって、上記のことを再認識できたとし、自分が「外国人」となることで、日本で外国人に出会った時にどのような対応をするべきかがよく分かりました。このプログラムへの参加を支援して下さった方々には深く感謝しています。ありがとうございました。